

教育実践の土台を養う読書を

岡 篤（兵庫）

教育書だけが読書ではない、それどころか

以前にも書いたことがあります。若い頃は小説を読んでいるときぼっているような気がしていました。

教育実践の本が一番で、次が教育理論、その次は、心理学や言語学、経済学といった隣接諸科学を読むべきだと思いついていました。

思い込んでいたので、自分がそう考えていることも意識していません。ただ、小説を読んでいると、(もつとちゃんとした本を読まなくては...)という意識がどこか働いていました。

ただ、それでも小説を読むことも好きでした。多少の罪悪感を感じながらも読み続けていました。

読書はくでなければならぬという思い込みの反動でしょうか、一時期、小説だけを読み続けていることがありました。私の

思い込みからいくと、やるべきではない行為です。ただ、不思議なことに、実践の調子がよいことに気づきました。

取り組んでいることは順調に進んでいく。そして何よりも、創造的なアイデアが次から次へと浮かんでいきます。そんなときは、学校に行くのが楽しく仕方ありません。

「明日は、あの指導を試してみよう」

「あの子にこんな声かけをしてみよう」と考えているのですから、当然でしょう。実践書を読んでいるのにどうしてそういうことが起きるのでしょう。

- ・偶然そういうことが重なった。
- ・それまでに読んだ実践書が生きている。

といったことも考えられます。ただ私の考えでは、次のようなことです。

- ・小説に没頭し、楽しめるような心身は、とても創造的な状態である。
- ・小説を読むことで、脳が活性化し、観察力や想像力が刺激される。

つまり、教育実践の土台、一見したところ見えない部分を豊かにし、活性化させているのではないか。今は、読書については、そう考えようになりました。

今回のテーマは、「おすすめの本 く教育の必読書から趣味本、マニアック本まで」です。趣味本、マニアック本でよいということですが。

持っている本の数は、教育実践が圧倒的に多いのですが、今回はそれに触れずに、「土台」の部分について書いていきます。

やっぱり小説が好き

はじめに、で散々ふれたので小説から始めます。

村上春樹や東野圭吾、百田尚樹といった現存の作家の小説をかなり読んできました。単純におもしろいと思ったら、続けてその作家の本を買う習性があります。

村上春樹は、「村上ワールド」という言葉がよく使われますが、一種独特の世界に引き込まれます。東野圭吾はよく、あれだけのペースで本を出しながら、読者を引き込むアイディアがつきないことに感心させられます。百田尚樹は、「夏目漱石以来の天才」だと思っています。あんなに違う分野で文体で、書くことができるとは！

歴史小説の世界

今現在の読書でいうと、歴史小説を手にとることが一番多くなっています。

佐伯泰英は、「月刊佐伯」といわれるようにハイペースの作家です。これまでの一般的な流れは、単行本が出て、売れたら文庫本になるというものでした。それをいきなり文庫本から変えた作家です。それだけ売れるということです。

佐伯氏は、「哲学や主題といったことを意識せず、ただ読者が楽しんでもらえることを第一に考えている」といったようなことをどこかで書かれていました。そういうだけあって、はまります。

ただ、シリーズ物が十本以上あり、少し

読んでみるとどれも面白い物ばかりです。

「ここにはまるとぬけられないぞ」という危険察知能力(?)が働きました。そこで、色々読んでみたくなっている欲望をおさえとりあえず、「居眠り聲音江戸双紙」だけにしぼりました。それでも全五十一巻です。途中でやめるわけにもいかず、終わつたときは感慨と共に、安堵感もありました。

それもつかの間、主人公聲音の息子の空也のシリーズがまた始まってしまいました。なんということをするのだ！

歴史小説といえば、司馬遼太郎と池波正太郎。この二人が同じ時期に生を受け、あれだけの仕事を残したということは、神の采配としか思えません。

龍馬が行く、真田太平記、菜の花の沖、播磨灘物語、劍客商売、鬼平犯科帳、仕掛人・藤枝梅安…。こう書き並べているだけで気分が高揚してきます。

語り出せば切りがありません。一つだけいうとしたら、今、私の鞆に入っているのは、司馬遼太郎の「関ヶ原 下巻」です。五回目ですが、読む度に面白くなっていきます。(岡田准一主演の映画はこの小説が原

作ですが、ノーコメント)

おすすめは「村上海賊の娘」

歴史小説の中から一つお勧めをするとしたら、「村上海賊の娘」(和田竜 新潮社)です。主人公 景(きょう)の奔放な魅力、そしてそれを使えば必ず勝つ、しかし決して使ってはいけない「鬼手」の存在。うーん、また語りたくなってきた。同じ和田竜氏の「のぼうの城」は、小説も映画も絶品！この小説の舞台となった忍(おし)城については、山本周五郎の本で知っていましたが、和田氏が取り上げるとこんなおもしろい小説ができあがるのかといった感慨もありました。

ちなみに事務局の岸本ひとみさんは、瀬戸内海賊の末裔だそうです。そういうえば…

ごめんなさい

ここまで書いて気づきました。今回、私は俳句の本をメインに書くつもりでした…。現在の読書時間の半分は、俳句関係です。関心がある方は、小川軽舟「俳句と暮らす」中公新書、をどうぞ、